

# 太和川・今池遺跡

発掘調査資料 6の5

第6地区

1980. 3

太和川・今池遺跡調査会

## は じ め に

大和川・今池遺跡は、20万㎡以上に広がる5、6世紀代を中心とした集落、水田址であることが調査成果として得ている。

第6地区は、ボイラ室等建設予定地の4,000㎡について、昭和54年12月から昭和55年3月末日にかけて発掘調査を実施した。現場調査には、大阪府教育委員会・石神 怡、堺市教育委員会・奥田 豊氏の指導の下に、堺市教育委員会・技術職員・森村健一が担当し、調査員及び調査補助員の協力を得た。雨天の多い調査期間中にもかかわらず調査に参加していただいた諸君に謝意申し上げます。

又、発掘調査中には、関西大学教授・網干善教氏、立命館大学教授・日下雅義氏、堺女子短期大学教授・嶋田 晓氏、松原市史編纂室主査・出水睦巳氏、大阪府南部下水道事務所・堺市下水道、松原市下水道ならびに地元各位から多大なる御協力を得た。

この小冊子は、速報としての性格のもので別の機会に本報告書が作製される。尚、冊子作製には、川口宏海・上野俊雄氏の協力を得て森村が編集、執筆した。

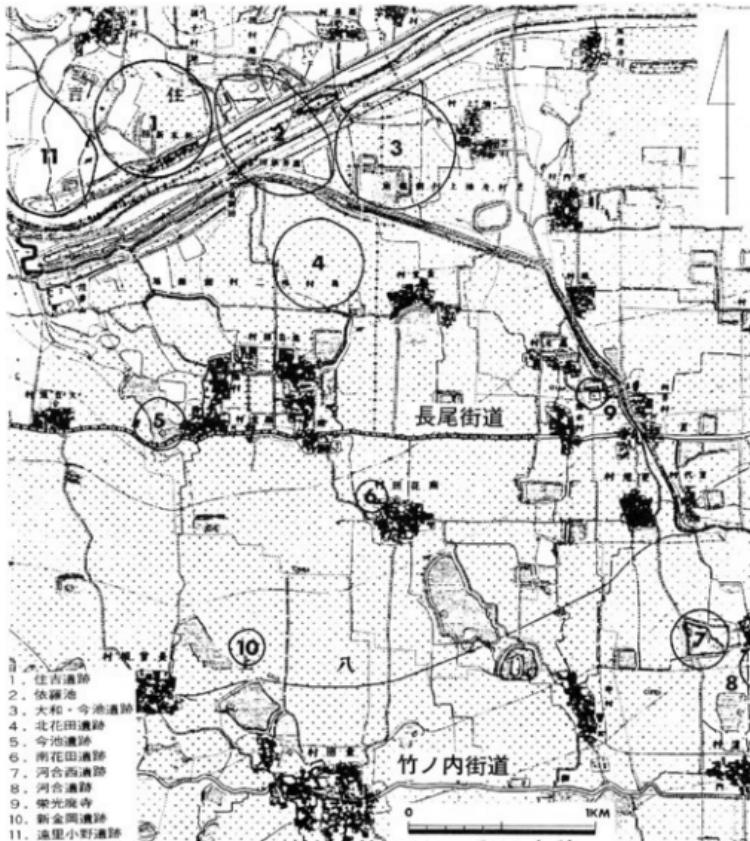


発掘調査風景

## 位置と環境

この遺跡は、行政区域上、大阪府堺市常盤町と松原市天美西町にあたる。遺跡の西半分は、洪積段丘中位の東縁辺に、東半分は、旧西除川の氾濫源内となっていた。特に、本遺跡内には、旧西除川の支流である幅数mの小川が北流している。これらの地質構造と造構の性格が相関関係を組みたてている。今までの数次にわたる発掘調査の結果、段丘上には集落跡が、氾濫源内に位置するところからは水田址が確認されている。

周辺遺跡として弥生時代から古墳時代にかけて生活を営んでいた住吉遺跡、が本遺跡の西側に所在する。南側では、弥生時代～中世にまたがる複合遺跡として北花田遺跡が知ら



大和川・今池遺跡及び周辺遺跡

れているが顕著な遺構は検出されていない。西除川をさかのぼると弥生時代の石鎌、弥生時代・中後期の土器と共に伴して1×2間の高床式倉庫を確認した河合遺跡がある。

13世紀後半から14世紀にかけて寺院址と関係したと思われる新金岡遺跡が報告されている。又、当遺跡にも現存する条里制遺構の基準となった長尾街道や、竹之内街道が東西に走っている。

狭間川をダム状に堰き止めた新掘町の今池遺跡からは、古墳時代中期において小河川に人力を加えて管理し、水盤祭祀を発掘調査た。

記紀にみられる依羅池が大和川・今池遺跡に隣接している事が絵図や考古学的な調査によって確認された。尚、数ヶ所の遺跡はすべて洪積段丘中位のくぼ地を北流する小河川に隣接している事に注目される。

## 調査成果

第6地区は北側の部分を第6-1地区、南側を第6-2地区と称して調査を進行した。検出した遺構を別けると古墳時代・江戸時代に限る。掘立柱建物、井戸、不明土壙以外は知られないのは古墳時代の遺構である。又、江戸時代の遺構も井戸の一種のみである。

### 第6-1地区、掘立柱建物(ST-1)

他の古墳時代の遺構と共に通する微高地で、かつ、遺構出土層が黄褐色砂質土という条件と下層の旧河道という層位が排水能力を容易にしているようである。

梁間2間(3.2m)×桁行2間(3.3m)のこの掘立柱建物は、やや南側に向って幅狭くなっている。柱穴は、径0.3m前後、深さ0.2m前後で小さい。この建物の特色は、南北に棟持柱を各2本づつ有する事である。倉庫と思われるこの掘立柱建物は、5世紀中葉であることが柱穴内の遺物より判明した。又、建物の主軸は、N-5°-Eであった。

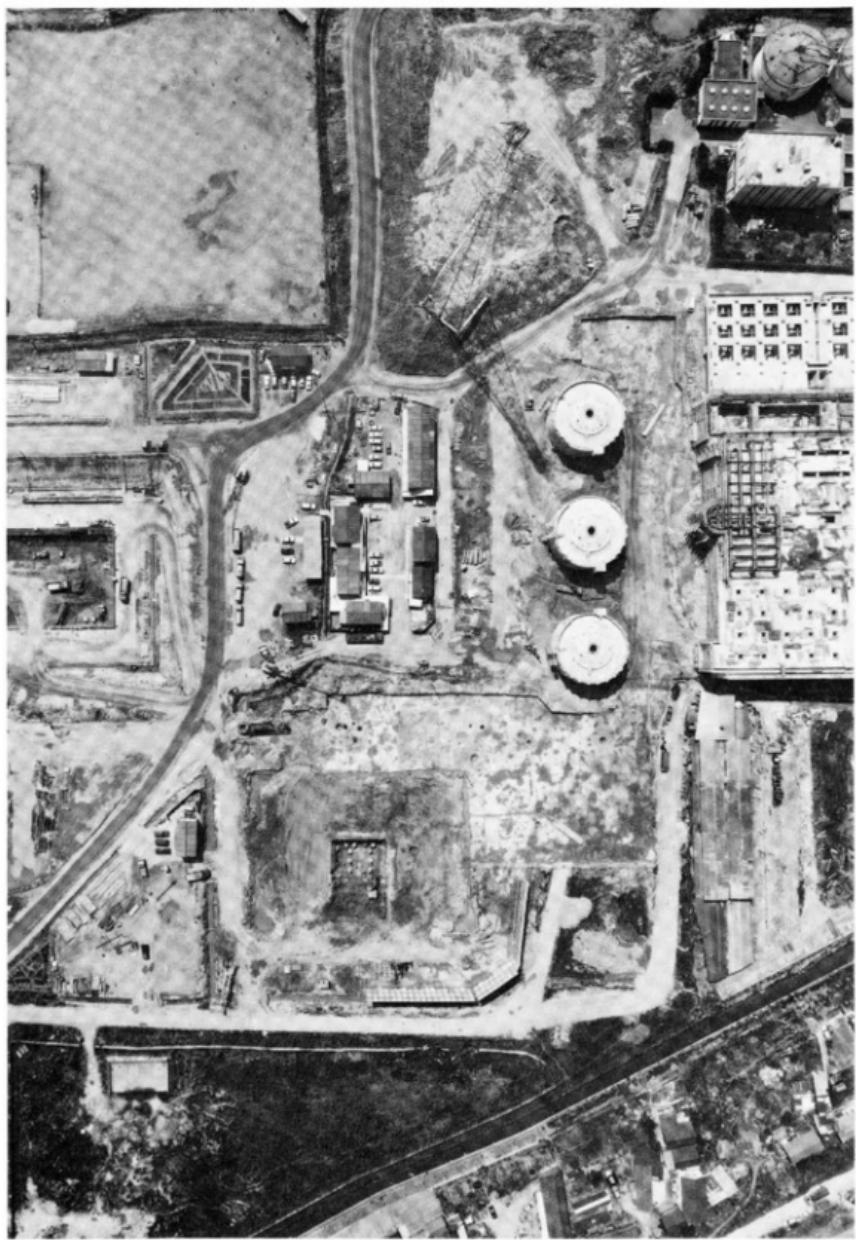
### 井戸(SE-1)

ST-1の西北、数mに位置する遺構で出土遺物から隣接の掘立柱建物と同時期に組み合わさって存在したと考えられる。

径1.44×1.26m×深さ1.10mを測る不定円形な平面を呈する。上辺から0.45m下において段を有し径0.64mに小さく垂直ぎみに掘削している。井戸内部の埋土としては、暗褐色粘質土、黒褐色粘質土、赤黒色粘質土の3層に別かれて流れ込みと思われる層位はなく廃絶期に埋め戻されたものであろう。出土遺物の多くは、段より上層で検出したがすべて破片化しており古式土師器、甕と初期須恵器が共伴していた。その他に、サヌカイト製の石鎌を検出した。當時、井戸底部より40cm高に湧水が見られるのは、同一レベルまで湧水層である地山の地層が青灰色砂礫層であることが確認されている。

### 井戸(SE-2)

ST-1よりSK-50をはさんで北側に位置する井戸である。径1.32m×1.17m×深さ



大和川・今池遺跡第6地区航空写真



第6-1地区 垂直写真

0.91mを測る。不定円形の平面を成し、GLより0.8m付近で段をもたせている。埋土としては、黒褐色粘質土（砂礫含む）の流れ込み以外の土層を除けば、黒褐色粘質土（10Y R 3%）、暗褐色粘質土、黒褐色粘質土（5 YR 3%）、暗褐色砂質土（10Y R 3%）（礫混り）のほぼ水平層に堆積した5層に大別される。断面が大きくV字形を示す埋土中より古式土師器の細片のみ検出した。湧水は、前者の井戸と同一であった。

#### 不明土壤（SK-27）

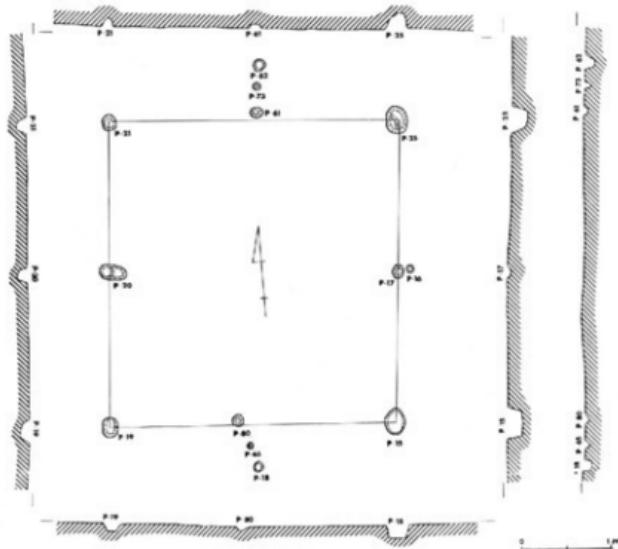
長軸3.31m×短軸1.74m×深さ0.27mという不成形な平面を示すばかりか南よりに凸帯がある。ただ、底部3ヶ所に径0.2~0.4mのピットがある。5種の流れ込みらしき土層以外の暗褐色粘質土、黑色粘質土、明黄褐色粘質土が十分な埋土として見た。出土した土器から6世紀中葉までに營まれたと考えられる。

#### 不明土壤（SK-31）

S T-1より西南に立地してSK-31~33まで一列に掘削されていた。径1.30m×1.04m×深さ0.12mという小判形に似ている平面をもつ。埋土の主流は、極暗褐色粘質土と黄褐色粘質土の二種で他は、ブロックの入り込み。

#### 不明土壤（SK-32）

SK-33と接して検出した遺構で径1.24×0.95×深さ0.16を測る不定円形な土壤である。凹レンズ状の断面に、暗褐色粘質土と黒褐色粘質土の埋土からは土師器・壺、甕、須恵器



・壺、甕、杯の破片を見い出す。

#### 不明土壙 (SK-33)

径 $1.82\text{m} \times 1.11\text{m} \times$ 深さ $0.2\text{m}$ の梢円形の平面内にはSK-32と同一の埋土が判明した。SK-31~33は、形状、出土遺物から堆してほぼ同時期に同様の性格の下に配置されたのであろう。

#### 耕作用井戸 (SE-88)

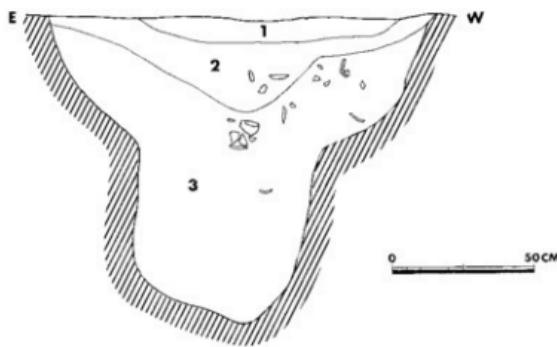
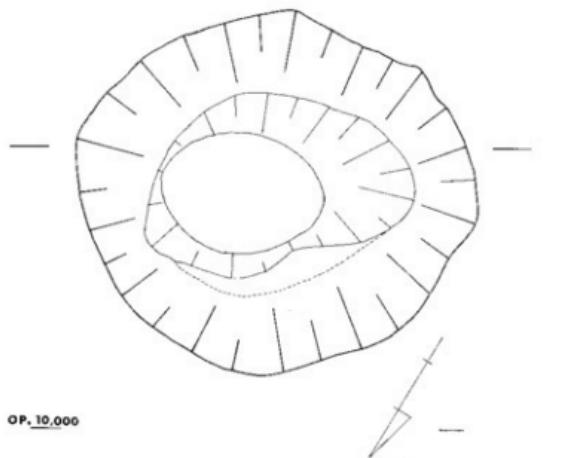
径 $2.6\text{m} \times 2.4\text{m} \times$ 深 $6\text{ m}$ の掘り方に木組、方形、隅柱横棟型と呼ばれる井戸である。内側、 $1\text{ m}$ 方形の木組を下段 $2.4\text{m}$ 、上段 $2\text{ m}$ の2段積み重ね幅 $0.3 \sim 0.4\text{m}$ の縦板を5段の横棟によって支えて、積み重ね部分には添板をはめこむ。井側と円形の井桁との接合板材を横棟にクロスするように存在した。

#### 耕作用井戸 (SE-91)

径 $1\text{ m}$ の桶側を5段に積み重ね当初、5段の瓦を重ねた桶側井戸である。各板材の幅は $6 \sim 15\text{cm}$ と差があり、下段ほど湧水を入れる切り込みが多く、最下段の桶側は尖がっている。出土遺物としては、瀬戸焼・大皿片を出土した。又、この井戸の深さは、地表より、 $6.25\text{m}$ に達する。



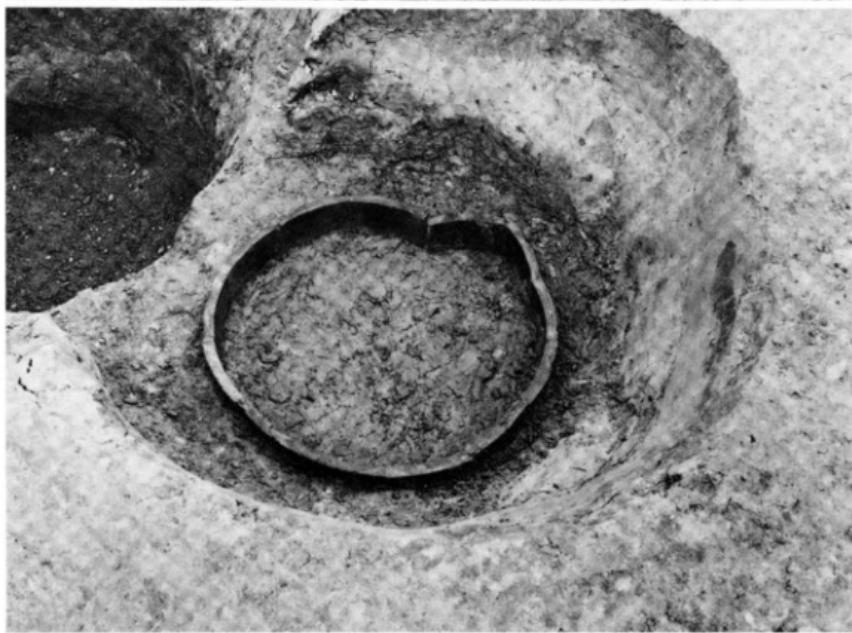
第6-1地区 井戸(SE-2)土層断面



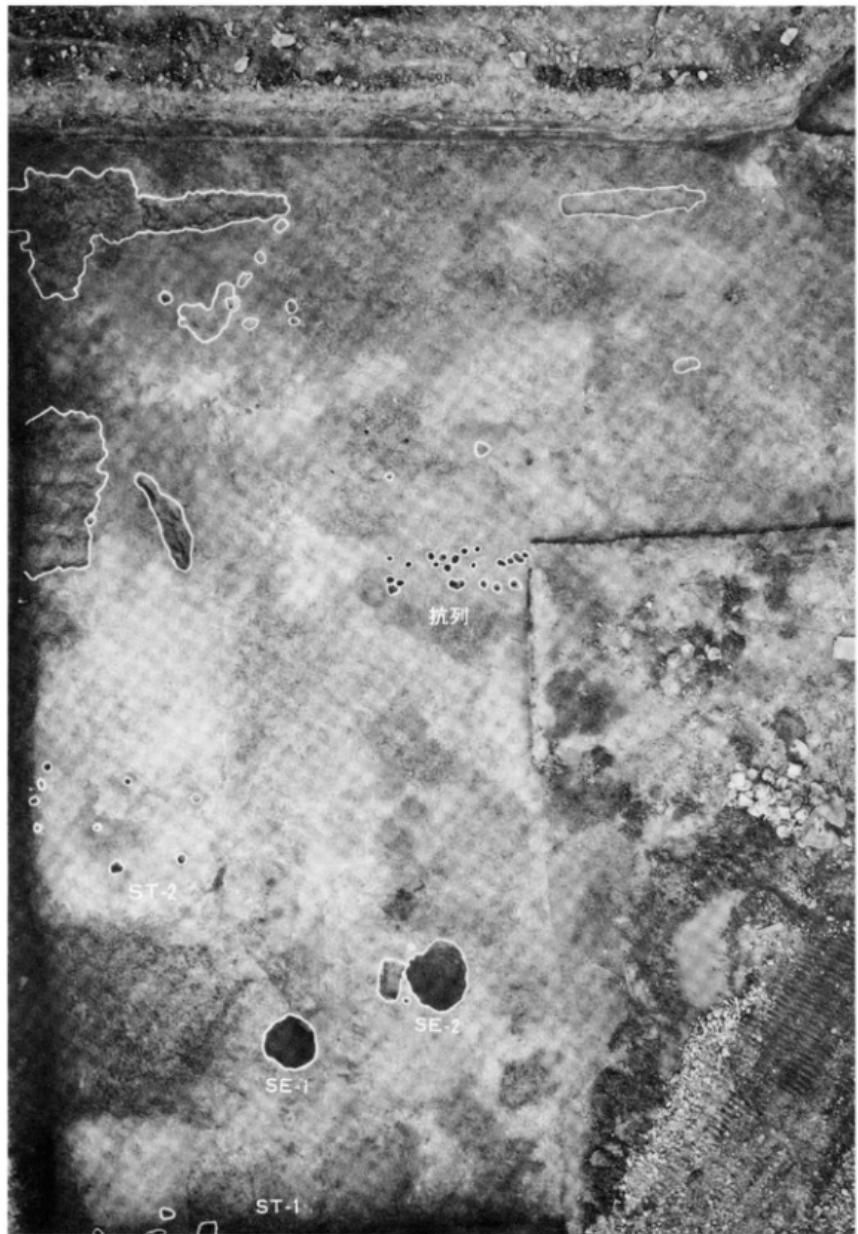
#### 土層名

- ①暗褐色粘質土 (10YR 3/4)
- ②黒褐色粘質土 (10YR 2/4)
- ③赤褐色粘質土 (25YR 3/4)

第 6-1 地区 井戸 (SE-1) 遺構図及び遺物出土状態図



第6—1地区 SE-88、91、耕作用井戸検出状態



第6-2地区 検出構・垂直写真

## 第6-2地区

### 掘立柱建物 (ST-1)

西側に棟持柱をもつ梁間2間(2.79m)×桁行、不明、径20~50cmの不定円形を成す、東隅柱からは、遺構検出面より1mまで沈下した径12cm程度の柱を検出した。工具による加工痕は見受けられないが裂きちぎった状態であった。尚、柱痕は弓状にカーブしている。

### 掘立柱建物 (ST-2)

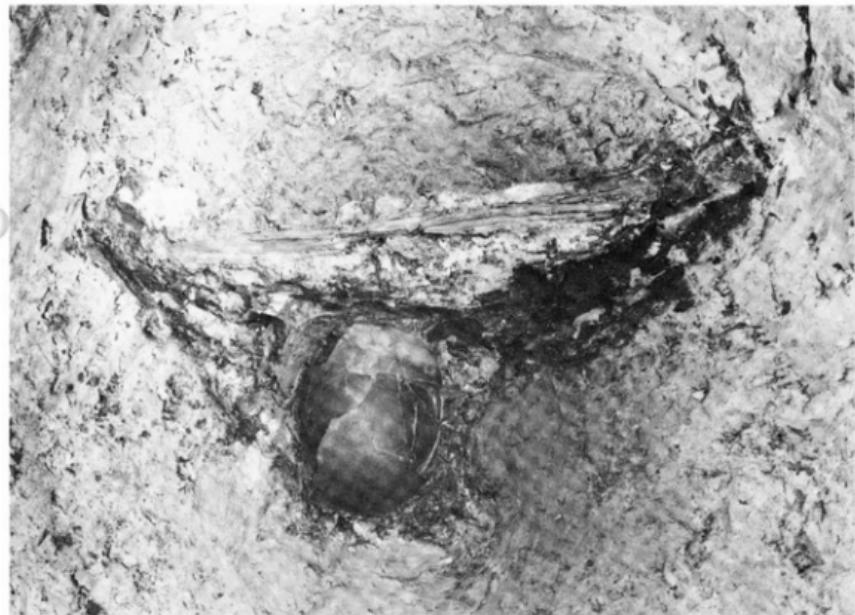
梁間1間(1.695m)×桁行2間(4.625m)、古式土師器片を柱穴内より細片として検出している。柱穴径は、いずれも15cm前後で深さも5~10cmと浅く、黒色粘質土を埋土としてある。

### 井戸 (SE-1)

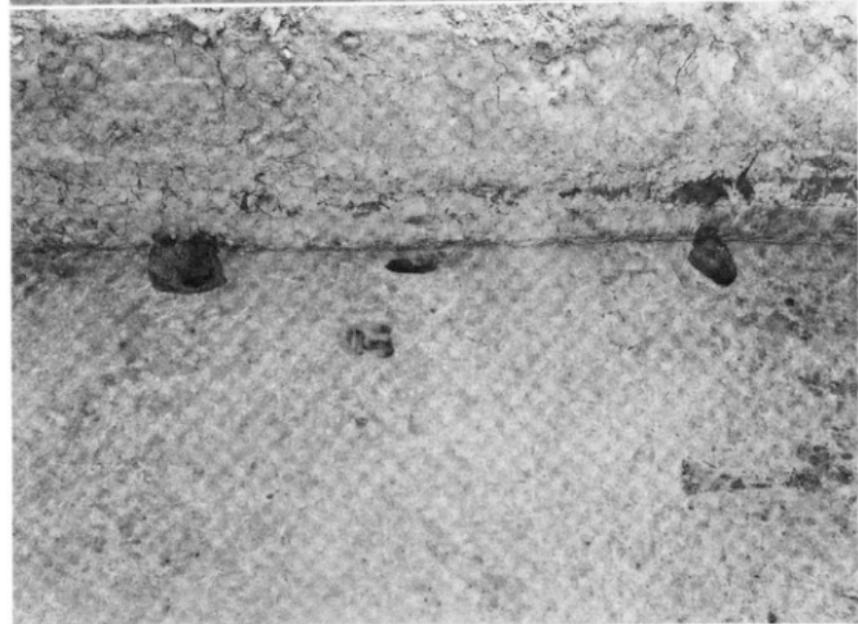
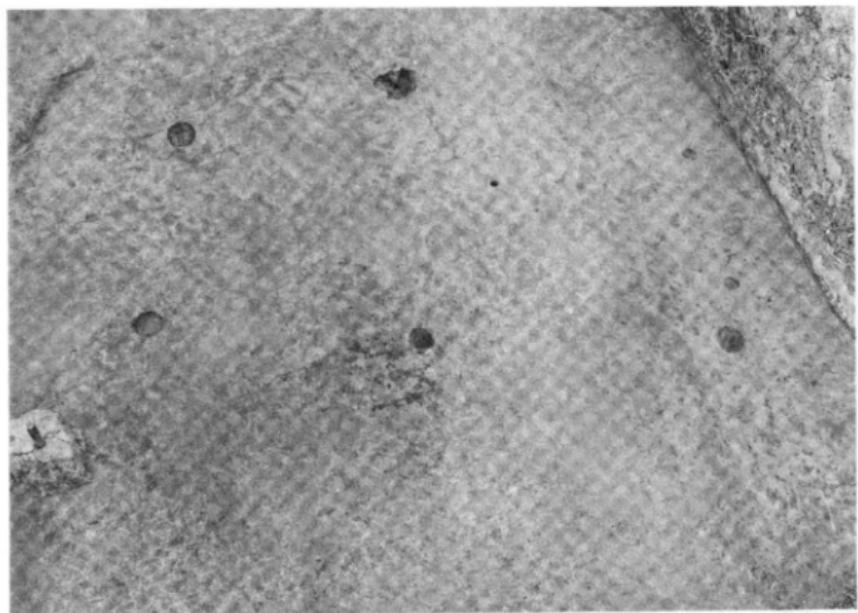
図示したように、土師器・高杯と甕を人為的な埋設とおぼしき状態で検出した。

ST-2と時期的にも位置からしても関係の深いものである。1.20×1.15×1.10(m)を測る不定円形を呈す。埋土は2層に大別出来て、井戸壁面をデコレーションを行う。

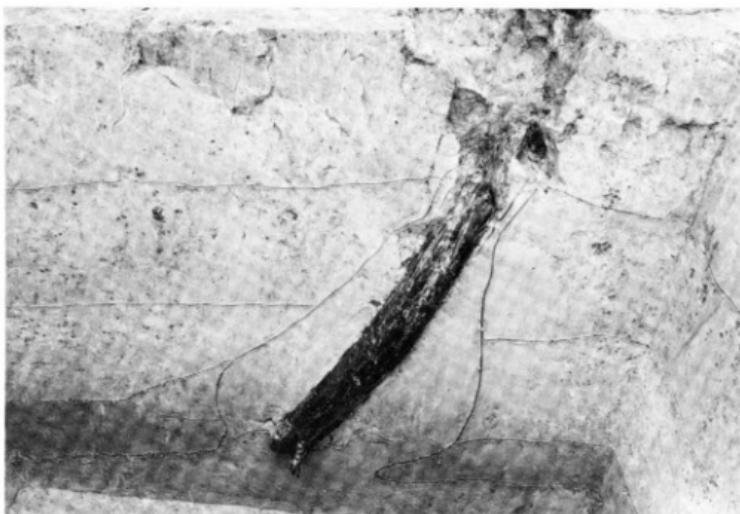
その他の遺構として、古墳時代に属する不明土壙・16ヶ所、溝状遺構・1ヶ所とほぼ南北に走る溝が上げられ、中・近世の遺構には、耕作用井戸と杭列、不明土壙に限定される。



第6-2地区 井戸(SE-1)遺物出土状態

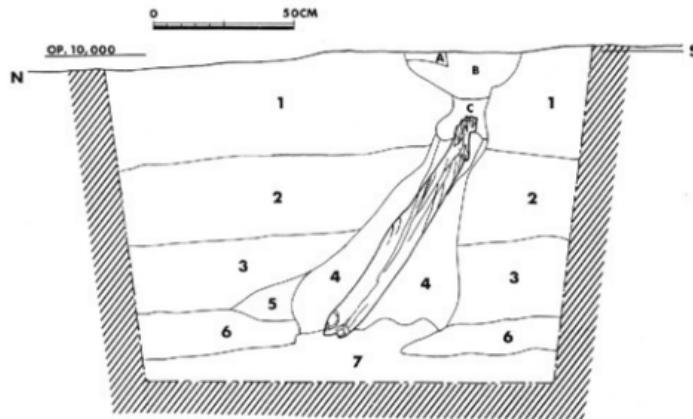
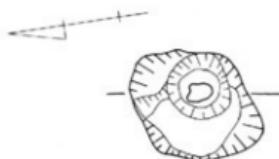


第6-2地区 挖立柱建物 ST-2(上)、1(下) 西側から

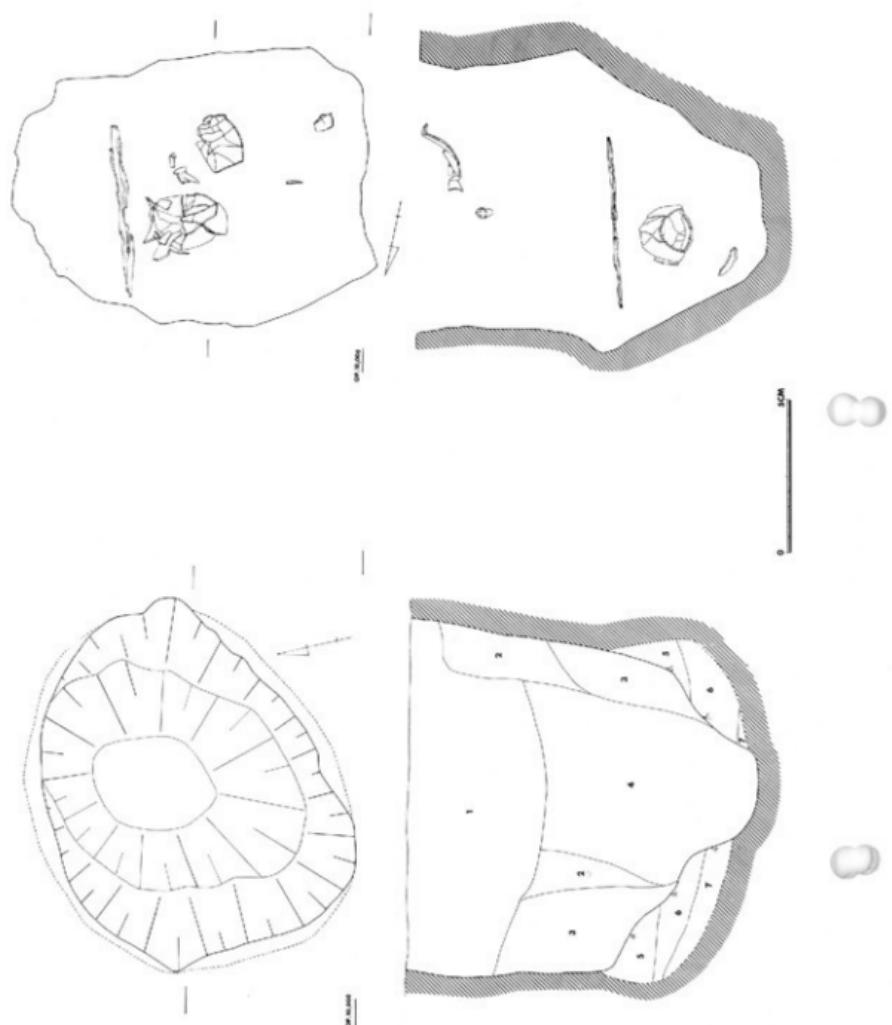


### 土層名

- ①明黄褐色粘質土(やや砂質)(10YR 5/6)
- ②橙色粘質土(7.5YR 5/6)
- ③黄褐色粘質土(10YR 5/6)
- ④明綠褐色粘質土(10G Y 5/6)
- ⑤浅黃色粘質土(5Y 5/6)
- ⑥浅褐色砂質土(10YR 5/6)
- ⑦青灰色砂質土(5 BG 5/6)
- ⑧黄褐色土(やや粘質)(10YR 5/6)
- ⑨暗赤褐色土(5 YR 5/6)
- ⑩オリーブ灰色粘質土(2.5G Y 5/6)



第6-2地区 ST-1掘立柱建物、P-1柱根断面図



### 土層面

- ① 黒色粘質土（10YR 5/2）
- ② ①と黄橙色粘質土（10YR 5/2）の混合土
- ③ ①と⑤の混合土
- ④ ③とオリーブ灰色シルト（25GY 5/2）の混合土
- ⑤ 灰白色粘質土（10Y 5/2）
- ⑥ 黄褐色粘質土（2.5Y 5/2）
- ⑦ 青灰色砂粘質土（5 BG 5/2）

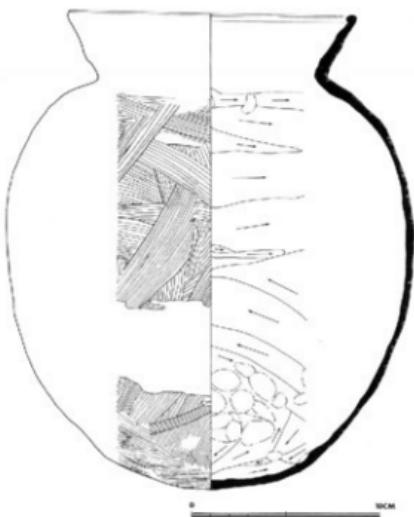
第6—2地区 P-6 遺構図及び遺物出土状態図



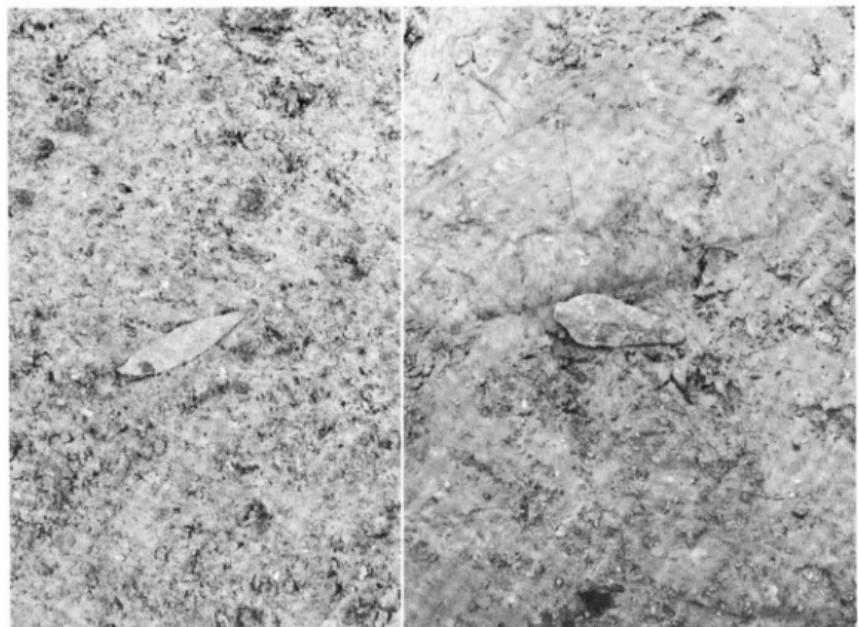
第6-1地区 包含層(黒褐色粘質土)出土、石器類



第6-2地区 P-6 出土、土師器・甕



第6-2 P-6 井戸、下層出土遺物



第6-1地区 石器、出土状態

### 結語

掘立柱建物3棟と井戸3ヶ所を検出し、その内2棟は、倉庫と思われる棟持柱を有する建物という特異な形態を示す。今までの調査においても認識されている事実である建物と井戸がセットとして組み込まれている。又、溝についても建物を方面状に区画した状態に検出している。遺構群の形成時期を5世紀中頃と6世紀前半に大きく別けられる。

古墳時代と考える遺構は、洪積段丘中位東縁辺でかつ0.5m前後の比高差を有する微高地に配列、選地されていて低地では検出されていない。さらに言える事は、5世紀中頃から形成された第2、3、5、6地区を結ぶ南北ラインは、巾30m、深さ2.5mに達する旧河川上に立地し遺構の基盤も黄灰色砂質土、底部の黄褐色粘質土とは排水能力に差が生じる。

宝永元年の開削とされる新大和川以降に營まれた数多くの耕作用井戸は、井戸底を3m下で検出した旧河川上の井戸以外は、5~6mに達した砂礫層を湧水層としている。

難波宮より大津道に南下すると思われる古道は、本地区的西端において確認されなければならぬのであるが道路とおぼしき考古学的資料は得られなかった。

# 大和川・今池遺跡

発掘調査資料その5

第6地区

発 行 大和川・今池遺跡調査会

発行年月日 1980.3.31

印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所